〔事例研究・1〕

地域文化の中で生きる

片山　元治（愛媛県／無茶々園代表）

無茶々園の法人化形態

私達は23年前に有機農業を通して町づくりをやろうと集まった明浜町内の青年農業者の集団です。今では白髪混りの頭になりましたが、今も私達は末代まで汗を流す喜び、うれし涙、悲し涙、笑顔等々のわかる生き方のできる集落、田舎づくりをめざす運動体として、活動しているつもりです。

従って、法人化など気にしていなかったのですが、仲間がふえ、生産量がふえてきますと、販売担当職員、生産担当職員をおかざるを得なくなって来ました。そこで彼らの身分を保障する為にも、販売上、対外的にも、みなし団体から法に認められた法人にしていく必要ができたのです。理想は地域社会協同組合というか、農業もやれ、生活、販売、社会保障、教育、文化活動まですべてをやれる、運命共同体的組合を作りたいと思っておりましたが、実際にはそんな理想の法人組織は認められておらず、又、経済活動では、株式会社形態の方が、協同組合よりも資本主義の世の中では有利という判断もあって、平成元年に農事組合無茶々園を、平成5年に株式会社地域法人無茶々園を設立致しました。

農事組合は無茶々園の仲間がよりそって生きる組織、あるいは新規就農者を引き受けたり、農地取得、有機農業技術の情報収集、開発等を共同でやる組織として、株式会社は無茶々園の仲間が地域文化の中で、都市文化にじゃまされずに生きていく為の資金集めの組織として、食べものを含め生産・加工した商品の換金組織として、また、西四国地域の海、山、陸の幸を生産、加工する人々や、西四国の自然をたいせつにしようという意識を持って、域内に生活している人々と提携を深める組織として、設立したものです。従って属に言う、無茶々園は農事組合と株式会社の2つの法人をあわせた呼び名ということです。一応株式会社は農事組合が最終的コントロールをするというしくみです。

今までは、たいした問題もなく会員50名程度で頑張って来ましたが町内全体の2割近くになって来ますと、結局、一般栽培のみかんを食って無茶々園はのびて来たので、少しずつまさつが出てきています。

地域文化の再生を

今後の展望としては、日本で唯一残っている南予の急傾斜地農業を国際競争の中でどう守り、しかも我々の生活を維持していくか。土地条件、労働条件のきわめてれつ悪な地域で生き抜くということは、農業が好きだけでは生きていけない運命を持っています。大規模化、大型機械導入もままならないところで柑橘という国際商品を作るということは不可能にちかく、今や、我が無茶々園は最後のガケップチに立たされているといえるでしょう。南予の柑橘農業はそういった意味でここ10年くらいの間でカイメツ的に廃園化が進むことが予想されます。

私達はそういった現状をふまえて21世紀に向かって無茶々の里で生き抜き、桃源郷化していくに